
DEVILS NAME

Cupid

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVILS NAME

【Zコード】

N1081X

【作者名】

Cupid

【あらすじ】

“俺は、彼女を助けるって誓った……だからまだ、帰らない”

ごく普通の少年“桐島 衍人”的日常はとある日から一変する……魔法で争い続ける異世界で、彼は大切な“何か”を見つけていく。その代償に、“何か”を失いながら……

プロローグ

昔の話だ……あの時の俺にとつては氣のせいだつたよつて見えたんだ。

あの日……俺には月が二つに見えた。一つは青白く光つていた。もう片方は、不気味なくらいに黄色く光つていた。

俺はその日、目が疲れてるんだと思って早めに寝たけど……その二つの満月が、これから俺に起こる出来事を教えてくれていたんだと、俺は今になつて思う。

……俺がそれに気付くのは……もつと……ずっと……未来のことだ

……

その日が……俺に起つてゐる異変の“ハジマリ”だつたんだ。

1話 奇怪ナ夢

太陽も沈み、段々と辺りも暗くなつていいく頃。ようやく部活から解放された俺は急いで校門を出た。

俺の名前は“桐島 衍人”。ごく普通の高校一年生だ。高校に入学して何ヶ月か過ぎ、この環境にも慣れてきた。友達もでき、部活にも入つて充実で平凡な毎日を過ごしている。

太陽も沈み、空の星が少しづつ見えはじめてきた。そして月も昇つてきた。

「…………」

「今夜は満月のようだ。だけど、

「…………？」

目の錯覚なのか疲れてるのかわからないが、月が一つに見えた。

「早く帰る」

俺は少しでも早く帰るため足を早めた。

「…………ただいま

「あ、おかえり衍人」

返事を返したのは、俺の姉だ。両親が昔事故で亡くなつたから、今は姉と二人で暮らしている。

「食事にする？ それともお風呂？」

「…………寝る」

俺は冷めた感じで言った。俺は少々ドライな性格なのだ。

「…………そういえばさ」

「何？」

「今日、月一つに見えた？」

「可笑しいこと言つたな。一つに決まつてんでしょう」

「…………ふう〜ん」

「ううん、やつぱり疲れてるんだ……俺。

「…………んじゃ、おやすみ」

そして俺は部屋に戻った。

バタン…

扉を閉めた後、服を着替えて、そのままベッドに倒れ込むよつて寝た。

その夜、俺は奇妙な夢を見た。

「…………」

目を開けると、周りは闇に包まれていた。

そして、目の前には小さな女の子がいて、よくわからない“何か”に捕まっているように見えた。

「…………君は誰？」

「…………」

彼女は何も言わない。いや、小さい声で何かをしきりに呟いている。耳を澄まして聞く。

「…………私を…………たすけて」

俺にはそう聞こえた。

「…………！？」

そして、この夢は終わった。

夢から覚めた後、少しの間、頭の中が混乱した。意味わからないし、だいいちどうすればいいか解らなかつたから。

でも、そんなことより大切な事を思い出してきた。今日も学校だ。いつもの事だが姉は、俺が起きる前に仕事に出かける。（教師みたいな仕事だと言ってたが、詳しくはわからない）

俺はパンにジャムをつけて口に運ぶ。

（…………余裕あるし、もうちょっととゆっくりするか）
ゆっくり食事をした後、準備をして家を出かけた。

「お～い、術人！」

遠くから俺を呼ぶ声がする。

「…………なんだお前か」

「なんだとはなんだよ！？」

「こいつは“仲岡 圭一”

俺の友達一号だ。

「今日も天氣がいいな！」

「…………朝からうるせえ」

こいつは熱血漢だし、何より人に気軽に接する事ができる。その性格だから俺ともすぐに仲良くなつたのだ。

「お！後ろから誰か来たぜ？」

圭一が言つた。後ろを振り向くと、そいつは必死に走つている。

「どうせあいつだろ？」

「まあ、ほほあいつに間違いないな」

それから何分後かにそいつは俺らに追いついた。

「はあ……はあ……お、おはよ～、術人君、圭一君。」

息を切らせながら俺らに挨拶をすることには“篠坂 陽子”。俺の友達二号だ。

スタイル抜群で美人（つて誰か言つてた）だから、クラスの男子からはとてつもなく人気である（俺は知らないけど）

「おっす陽！」

圭一は彼女の事を“陽”つて呼ぶ。

「お前、また寝坊かよ」

俺は少し茶化す。

「寝坊じゃないもん！てか私、毎日寝坊してないよー。」

まあ、こいつが寝坊したとは思つてないけども…

「まあ、言われてみればそうだみなあ。陽は俺より早く来てるから

な

「お前が遅いだけだろ」

つてか寝坊するのは、大体が圭一だ。

「なにを～！ 言ってくれんじゃんか！」

「……早く行くぞ？ 時間がない」

携帯の時計を見ると、もう8時だった。ホームルームは8時20分からだ。

「うげっ！ こんな時間かよ！？」

「二人とも急ぐよ？」

陽子はそういうて走り出す。俺らも陽子に着いていく。

何も変わらない平和な毎日。普通な日常。本当に楽しい時間だった。

あの時までは……

2話 終ワリノ始マリ

昼休み。1～4時間目の授業も終わり、俺達三人は屋上へと向かった。理由はもちろん昼食をとるためだ。

「やつぱし屋上はいいな」

話は大体、圭一のじうでもいい話から始まる。

「どうしてなの？圭一君」

陽子は真面目に質問をする。俺は聞いてるだけ…

「だつてさ、このきれいな青空を見ながら飯が食えるんだぜ？」

「空なら教室でも見えるけど？」

少しだけ俺も口を挟んだりする。

「教室でみる空とは違うんだよ！ 術人はわかってねーなあ」

「……ハイハイ

そんなん知るかよ！ って言いたかつたが、とりあえず思い止まった。

「俺昨日、変な夢見たんだ」

いきなり圭一が言い出した。

「なんか青く光ってる奴がいてさ、小さい声で何かを呟いているんだ」

「変な夢だね」

「しかも周りは知らない場所なんだよね。炎に包まれてたしち」

「……」

俺は少し驚いた。出でくる奴や風景は違えど、内容は俺の夢と同じだった。

「どうした？ 術人」

「……いや」

「なんでもない… そう言おつとした時、

ピーン

何かが割れた様な音がした。

「…………！」

圭一にも聞こえたようだ。

「陽は先に教室帰つといて。俺らひょひょと用事思い出した

「うん、わかつた」

そういうて陽子は教室に戻つて行つた。

「何だつたんだ？あの音」

「知らないよ」

圭一は少し考えこんだ。

そして、

「俺らも教室帰つか」

「…………そうだな」

俺はそう言つた。けど、

「…………！」

「どうした？」

「…………この教室……」

俺が指差したのは、化学教室。

「なんだか変な感じがする」

「そうか？」

「ちょっとだけ変だつていうか……」「……」

「じゃあ中に入つてみるか？」

圭一の提案に俺は頷く。

ガラガラッ

圭一は勢いよく扉を開ける。

「…………」

特に変わった様子はなかつた。

「気のせいじゃね？」

そうかもしけない……俺もそう思いはじめた。俺が気にし過ぎたのかもしけない。

「まあ、何もなかつたつつーことで、わざわざ帰つぜ」

「……あ」

俺らは化学教室を出よつとした。圭一が扉に手を伸ばした。

その時、

「…………!?」

「…………!!」

いきなり教室の空氣が変わつた。とてもなく氣味の悪い雰囲氣が、教室中を包み込む。

圭一も、この空氣の変化には気付いたようだ。

後ろを振り向くと、一力所に黒い影が集まつてゐる。影はどんどん大きくなり、少しずつ形を変えて怪物みたいになつていく。

「おい！…なんだよあれ！…」

圭一が尋ねてくる。

「…………知るかよ」

影はどんどん俺らに近づいて来る。

「これ……夢だよな？」

「…………とつあえず逃げるか」

「お…おつー！」

そして俺達は教室を出よつとした。

「…………なんで！？」

「どうした？圭一」

「扉が開かない！…」

「…………」

後ろからは、影が近づいて来る氣配がする。

影は俺達の方へ手（の様なモノ）を伸ばす。俺達の周りには少しづつだが、影が集まつてゐる。

「…………チツ」

絶体絶命か……そう思つた時、頭に声が響く。

『…………見つけた』

最初は意味が分からなかつた。そのことを考へてる間にも、影は俺

らを包み込み続けている。

そして、俺はある一つの仮定にたどり着く。

「……チツ」

俺はとつさに圭一を突き飛ばした。

「痛つ！何しやがんだ！」

「こつするしかないと！」

影は俺の周りに円を造る。そして、その円の中には、星型の光が現
れていく。

多分これは、魔法陣だ。

何となくだが、俺はそう思った。

魔法なんかありえないとは思うが、この状況からして、信じるしか
他なかつた。

魔法陣が光に包まれた時、

「術人！！」

俺は、暗闇の中に、落ちていった。

圭一の声は、少しずつ、小さくなつていった。

俺はまた夢を見た。

あの時の夢と同じ状況だった。周りはやつぱり暗くて、田の前には少女が捕まっている。

「……君は誰？」

俺は彼女に問い合わせる。

返事はない。

「なんで捕まつてんだよ？」

「……」

これも無視。

「二度目だ……君は誰だ?……というか君は何だ?」

「……」

これも無視か……と思つていたら、

「……私は」

彼女は口を開いた。初めて、俺の問い合わせに答えた。けど、

「私は……魔女よ」

幼い彼女の声色はとても大人びていて、まるでこの先の人生を諦めたかの様な暗く沈んだ声だった。

「……はあ?」

俺は彼女の問いに、そう応えるしかなかつた。

「魔女つて、あの魔女か?」

「……その通りよ」

……意味分からん。あの時の黒い影といい、この少女の言つてる事といい、分からん事が多すぎる。

「……貴方はまだわからないわ」

だけど……と彼女が呟く瞬間、周りが明るくなる。

そして、夢が終わった。

「…………」

町を覚ましたらそこは、見知らぬ場所のベットの上だった。

「…………ここはどこだ？」

体を動かそうとした。

「痛つ……」

突然体に痛みが走る。よく見ると、体中に包帯が巻かれている。

「…………」

「あ！ 気づかれたのですね？」

扉の方角から声がした。振り向くと、白衣を着た女性が、薬や新しい包帯を持って来ていた。

「大丈夫ですか？」

「…………多分」

俺は曖昧に答えた。曖昧にしか答えられなかつた。俺は彼女に問い合わせる。

「ここはどこですか？」

「ここは、ハウテック・レイディア魔法学園です」

「え？ 魔法学園？ なんだそれ？」

俺は改めて窓の外を見る。

「…………」

実際俺は驚嘆している。

まあ、俺の町とは違う場所に来たつてことは分かつてた。町並みも、日本とは違うし……

だけど流石に魔法学園は予想してない。まさか異世界とはね……

「どうかしましたか？」

俺はこの部屋から出ようとしていた。

「どうかしましたか？」

俺はこの部屋から出ようとしていた。

「あ、まだ動いたら……」

「ちょっと、外に出たいの……その……肩かしてくれません?」

「……いえ、構いませんよ」

やはり「こはは」は異世界らしく、空を飛んでいる生き物が違うし、周りに車や、ましてや高速道路なんかは全くなかった。

「「こはは」どんな学校なんすか?」

俺は彼女に尋ねてみる。

「「こ」の学園では、基本的魔法から上級魔法までを教えているのです

「へえ~……」

それくらい何となく分かる。

「そして、魔法の素質の優れる者達を、戦争へと駆り出していくのです」

「……戦争?」

まさかのワードが出てきた。

「はい、我が国では、西のハインツティ国と、今までに戦争中なのです」

そう、「こ」の国では、日本では起らなかった、戦争が起きていたのだ。

俺の横を、何名かの生徒が通り過ぎる。

彼ら、あるいは彼女らは、兵士になるかもしないのだ。

「……俺と同じ年くらいなのこ……」

「そういえば、あなたは「こ」の生徒なのですか?」

「えっと……どうして?」

「だつて「こ」の制服、「こ」の学園の物ではないものの

なんと答えればいいのだろう。

多分異世界とか言つても、彼女は信じてくれないだろう。

「えつと……田舎の方の学校でして……」

「そつなんですか……」

「とりあえず、嘘で」こまかした。

「じゃあいつその事、この学園に転入しませんか?」

「転入?」

「そう、学園長には、私から言います。多分OKは貰えると思うの
で、怪我が治つたら転入って事で」

「ちょっと……あの!」

俺の言葉は彼女に届かず、彼女は走り出した。

そして一週間後、
怪我が治つた俺は、

「桐島……術人です」

本当に転入できてしまった。

自己紹介の後、俺は指定された席に座った。

「新しい制服だし……」

「マジで転入できたよ。」

「…………ねえ」

隣から声をかけられた。女子生徒だった。

「…………何?」

「あなたの魔法って何?」

「魔法?…………魔法って言われても……」

「まだわかんないんだけど」

「…………まだ魔法使えないの?」

……流石田舎者ね

彼女は鼻で俺を笑つた。

「……チツ」

彼女に気付かれないよつて、小さく舌打ちをした。

「次は、実戦の授業です。

……キリシマコキト君

「……？」

フルネームで呼ぶなつて……

「……君はまず、武器を選びなさい」

「……はあ」

武器と言つても、模擬戦用だし、しかも、

「剣か杖しかない」

「こん中から選べつて言われても……」

「魔法使えないから、剣しかないし……」

つて事で、俺は剣を選んだ。

「あの……選んだんスケと」

「ああ、それじゃあ……彼女と手合わせしてくれ」

「……あ！」

「……チツ」

俺は舌打ちをした。

先生の後ろにいたのは、俺の隣にいたやつだ。

「あんた、魔法使えないのに戦えんの？」
「彼女は少しナメた口をきいてきた。

「五月蠅いな……」

俺は素早く走り出し、剣先を彼女の喉元に向ける。

「…………なつ！？」

「…………実戦だつたら、死んでんじゃない？」

「つ見えて俺は、剣道部員だつたから、この大きさの剣の扱いは長けていり。

「現役剣道部員ナメんなよ」

俺は彼女に聞こえないぐらい小さい声で呟いた。

彼女の顔を見て、俺は心の中で笑った。

彼女の顔は、驚嘆と屈辱の色がくつきりと出ていた。

「あいつ、超ムカつく……」

そう言つてゐるのは、俺の隣席のあいつ。

名前はたしか……アリアだつた氣がする。

そのアリアが言つてゐる“あいつ”とは、もちろん俺の事だ。

前回の模擬戦で、俺に敗北してから、あいつは俺を目の敵にしている。別気にはないけど……

「あー……あんな田舎者に私が負けるなんて……」

何日も前の事なのに、まだ根に持つてんのかよ。

彼女は、俺の姿を見つけると、すぐさま睨んできた。

次の授業は模擬戦で、相手は……

「やつとあんたとやれるわ」

アリアだつた。

「まだ根に持つてんのかよ」

「五月蠅いつ……前回の私とは違うのよ……」

そう言つて彼女は、いきなり炎を出して來た。

「……」

俺はそれを軽くかわす。

「……！」

「フフフ、かかつたわね」

足元には魔法陣が描かれていた。

その魔法陣からは小さい氷が発生し、俺の足を止める。

「……チツ」

「これであんたは動けないわ……私の勝ちね」

「……」

彼女が俺にとどめをささうとした時、

「大変だみんな！」

「敵が攻めてきたぞ！！」

「皆さん、戦闘の準備をしてください。
もし危ないとthoughtたらこれを使ってください」

先生は俺達に紙切れを渡した。

先生から渡された紙には魔法陣が描かれていた。

「それでは……戦闘開始です！！」

その一言と同時に、俺以外の全員が散らばった。

俺も遅れて戦場に着いた。

目の前には、重装備の兵士が、学園の生徒や先生と争ってる。
何歩か近づいていると、足元には何名かの死体があった。

「…………」

幸いにも、俺は同級生の死体を見なかつた。

これが戦争。本当に戦争をしてるんだ。

「キリシマコキト！後ろ！！」

誰かが言つた。振り向くと見知らぬ兵士が、剣を振りかぶつている。

「…………！」

逃げれない。兵士の剣は振り下ろされた。

俺は目を閉じた。

「…………！」

次に目を開けると、夢で見た空間にいた。

目の前にはあの少女もいる。

「…………なんか用か？」

「せっかく助けてあげようと思ったのに、そんな口きくのね？」

「助ける?」

「あのままなら、貴方は確実に……死ぬ」

「……」

「だけど、私の魔法を少し貸してあげる。それで助かるはずよ
お前、魔法持つてたのか?」

「言つたでしょ?……私は魔女だつて

……そのかわり条件があるの」

「……なんだよ、その条件つて?」

「……」

彼女は少し間を開けて、そして覚悟を決めたような顔で、
「私を……探して。

「……」こんな夢の中なんかじゃなくて……

といった。

「……わかつた、見つけだすよ

「……貴方は自分の命のためならなんでもするのね」

「違つ」

「じゃあ何故決断が早かつたの?」

彼女の質問に俺は、彼女と同じような覚悟を決めて言つた。

「確かに死にたくない。でも、それだけじゃない。

……君みたいな幼い子が、必要のない覚悟をしてるんだ。俺も、そ

れに報いなきやならないだろ?」

「別に報いなくともいいけど……」

「それでも俺は、君を見つける!絶対だ。

絶対に……君を助ける」

「……ありがとう

そう言つた後、彼女は一度目を閉じる。そして目を開けると、彼女の目の色が紅く変わっていた。

「……契約よ。こっちに来なさい」

「……ああ

俺は少しずつ、彼女のもとへと歩く。

彼女の近くにたどり着くと、

「……し、しゃがみなさい

と彼女が言った。

「……ああ」

俺は、彼女の言つた通りにした。

「……

彼女の顔がだんだんと近づいてくる。

「……ちよつ!?」

そして、彼女の唇が、俺の唇と重なつた。

「……てめえ!!」

「……これで、契約成立よ

だんだんと周りが明るくなる。

「最後に……貴方の描いた“武器”を想いなさい」

「俺の……武器?」

そこで夢は終わった。

気付くと田の前に兵士がいて、剣を振りかぶっていた。

俺は咄嗟に手をかざす。

すると掌から黒い影みたいな物が出てきた。

影は兵士の剣にとりついて、動きを封じている。

その隙に攻撃射程から逃げる。

「何?……その魔法」

アリアがこちらに近づき言つた。

「……まあ見てな」

俺は両手を前にかざす。影達が両手を包む。影が消えた頃には、両手には新しい武器を持っていた。

「おお……マジで出てきた!」

銃と剣が一緒になった“双銃”。

この双銃は、俺と圭一が初めて一緒にやつたオンラインゲームの武

器をイメージした物だ。

「あ！危ない！！」

アリアが叫ぶ。後ろから兵士が三人来た。

「……落ち着けって」

俺は兵士達に銃口を向け、トリガーを引く。

：一人

：二人

：三人

兵士達はバタバタと倒れた。

アリアがこつちに走つて来る。

「あんたバカじゃないの！！一人で兵士倒すとか……」

「だから落ち着けって」

「……！あんた、その目……」

「目？」

「紅くなつてる」

彼女の魔力を貰つたからだろうか、俺の両目は、彼女と同じ紅色になつてゐるらしい。

「ああこれ……契約の証だからな」

「何それ？」

「お前には関係ないことだ」

突然空に花火（っぽい何か）が上がつた。

「何だあれ？」

「撤退命令よ

：戦闘は終わったのよ

：……

こうして俺の初戦闘は終わつた。

この戦争での死者はほぼ相手の兵士だったが、こつちの勢力も……

中には何名かの生徒も死んでいた。

：……

戦争なんて、後味の悪いものだ……

：……

この世界の人達にそう叫びたかった。

それでも、魔法戦争は続く。

5話 異世界ノ王女

あの戦闘から数日後、俺はこの学園で、軽く有名になつた。

理由は、俺の武器である“双銃”。

この世界では、銃自体がない。だから、銃が一つあるだけでも珍しいのだ。

学園内の研究者は、この双銃の性能を知りたがつていて。

「ねえ君、君の武器、ちょっと見せてもらえるかな？」

こんなふうに尋ねてくるやつもいなくはない。

「……なんで？」

「いや、ちょっと研究を……」

「他のやつに頼めば？」

まあ俺はこんな感じに追い返しているが、……

尋ねてきたやつは、諦めてどこかに行つた。

「……めんどくさいなあ」

「お疲れのようね」

向こう側からアリアが歩いてきた。

「……なんか用か？」

「先生が呼んでる。私について来て」

「めんどくさいなあ」

「いいからー早く」

俺はアリアに着いて行き、校長室（らしき場所）にきた。

「失礼します」

「おおアリア、よくきてくれた。君も……」

「……はあ」

学園長……つていうから、老人をイメージしたけど、そこまで老いてはない。

「俺なんか用ですか？」

「ああ、この前の戦争を覚えているかい？」

「……はい」

言われなくても、あんな後味の悪いもんは、忘れたくても忘れられない。

「……普通、生徒が兵士を倒すことはできないんだ」

「……はあ？」

「兵士は皆大人だ、魔力が子供より強い。生徒はまだそこまで魔力はない。できて足止め程度だ。だが君は、その兵士達を、一人で、しかも三人倒したらしいじゃないか」

「あれは魔法じゃなくて、武器の性能ですよ」

「だけどその武器を造つたのは、君の魔法だ」

「……俺の魔法じゃないし」

俺は小さく呟いた。

「そして、その君の魔法の属性も、この国じゃ珍しいんだ」

「影が……ですか？」

「惜しいね。君の魔法は、

「……闇だよ」

「闇……ですか」

「そう、闇や光といった魔法は珍しい。この世界中にも百人いるかどうかの属性だ。そのほとんどが魔女か王族になつていて」

そこで学園長は、一拍開けた。そして繋げた。

「もしくはそれらと契約をした者……か」

俺は学園長を睨む。睨みながら言い放つ。

「……何が言いたいんですか？」

ピリッとした雰囲気が漂う。

その雰囲気を吹き飛ばしたのは、学園長の言葉だった。

「いや～、話がズレて済まない」

「……？」

「今回の戦争になつたこの学園に、ある人物が来るんだ。だから君

達二人にその護衛をと思つて呼んだんだ。また敵が来るかも知れないからね

「あの……どうして私達一人だけなんですか？」

「ああそれはね、アリア君は成績優秀だし、防衛魔法も取得している。そして行人君は、双銃での遠距離射撃がある」

「……」

「それで、護衛をする相手は誰でしょつか？」

「うん、そうだね。王女様だよ」

「……え？ 王女様？」

「……へえ、王女様か」

「へえ、……じゃないわよ！ 王女よ！ ？ 王女！ ！ ？」

「守ればいいんだろ？ 簡単じゃん」

「そう簡単なもんじやないし、この国の次期女王候補よ？」

「だから、お前がその王女に防衛魔法つてやつを付けとけばいいじやん」

「そうだけど……魔法陣造んの大変なのよ！ ？」

「……五月蠅いな」

俺は双銃を取り出す。

アリアは少し間を開けた。

そして緊張したような顔で一言言つた。

「不安じや……ないの？」

「……」

俺も少し間を開けて言つた。

「不安じやねーよ。お前成績優秀なんだろ？ だつたら防御はお前に任せれる。

……最悪俺が、体を張つて守るからさ」 俺はアリアの頭をポンッと叩いた。

「そう考えたら樂じやね？ 一人で氣負いすぎなんだよ」

「……フフ、そうね。あんたもたまにはいいこと言つじゃん」

アリアは小さく笑つてゐる。気のせいかアリアの顔が赤かつたような

そして王女様が来る前日。

「……」

俺は双銃が正常に使えるかを試す。

目の前にある木に銃口を向ける。

一度呼吸をして止める。そしてトリガーを引く。

タダンッ タダンッ

「……よし」

とつあえず正常だ。遠距離の射撃もできる。

「……明日か」

そして戻る。

「……」

「ガチガチじやねーか」

「仕方ないじやない、王女を守るのよ。緊張するに決まってるわ」

「……肩の力抜けって」

「……あ！」

校門からいがにも貴族が乗るよつた馬車がやつて來た。

「ほら、アリア、魔法」

「乗り物には無理よ。

……だから防衛の魔法陣をこの紙切れに描いてきたわ

「……じゃ、渡して来な」

「ええ！？私？？」

「おう、俺めんどいし、ここで見張らなきゃいけないし、それに、女同士の方がいいんじやね？」

「う、うん。わかつたわ」

アリアは馬車の方に向かつて走つて行つた。

「……さてと」

俺は周りを見回す。

「……」

まだ見えないけど、何名かの気配がする。

「マジで来てるよ……」

一力所が光つた。多分魔法を使おうとしているのだろう。

「……」

俺は双銃の銃口を、光の場所に向ける。少し闇の魔法を弾に纏わせる。

呼吸を止める。

トリガーに手を置く。

そして、トリガーを引く。

一発 二発 三発

銃口から出た弾は、黒い光を纏わせ、魔法陣の元へと向かう。

光がおさまる。多分命中。

今度は別の場所から光る。

その光の場所から、炎の弾がこちらに向かってくる。

双銃を炎に向け、トリガーを引く。

炎の弾を消した。

そのまま連射。

光が消える。命中。

「あと一つ」

最後のエリアを見ると、一人別の場所に行こうとしている。

「させるかよ！」

空弾を入れ替える。俺のイメージ通りの武器だから、弾の入れ替えは楽だ。

「……チツ」

しかし、その間に逃げられた。

多分、王女の所に行つたのだろう。

俺も王女の元に向かう。

「はあ……はあ……お、王女様！！」

「…………？」

「はあ……はあ……あの、これ持つていて下さー

「この紙切れは？」

「お守りだと思つて下さー」

俺は王女を探して走り回る。

「…………どこにいんだよ？」

よつやく見つけた。アリアも一緒に。

「アリアアッ！！」

「……衍人？ ビうしたの？」

「…………この辺りに……敵がいる」

「えっ？」

「…………そつちも気にしてくれ

「わ、わかった」

「…………」

もう一度周りを見回す。どこかはわからないが、魔法陣の気配がある。

俺は王女の方角を見る。

後ろから炎の弾が王女に迫つている。

「…………チツ！」

王女とかぶつてるから、双銃を使えない。

「あんた、危ない！」

王女は俺の声で後ろの魔法に気づいたが、間に合わない。

「…………クソツッ！」

俺は走り出す。

向かうは王女の元。

俺は自ら炎に飛び込む。

「…………！」

「………… 術人！！！」

「ああ………… 意識が朦朧とする中、力を振り絞り、双銃をある方向に向け放つ。

黒い弾道は、敵がいた場所へと向かい、光る。命中したようだ。

「………… 大丈夫ツスか？」

「え………… ええ」

「そりやあ………… よかつた」

俺は心配をかけないように微笑む。

「………… 貴方は」

「…………？」

王女は何かを言いたそうだったが、俺の意識がもたなかつた。

目の前が黒くなつていき、最後には意識がとんだ。

6話 ハーベイスト

田を覚ますまで、俺は夢を見ていた。

小さい頃の思い出。まだ6才だった頃の記憶。

夏休みの間、公園に執事を連れた、いかにも金持ちはぽい感じの女の子がいて、よく遊んだ。でも、すぐにいなくなつたけど……

「……」

俺は田を覚ました。

周りを見ると、ここは保健室のようだった。

多分誰かが運んでくれたんだろう。

「……やつと田を覚ました」

側にはアリアがいた。

「……あんたバカなの？私が防衛魔法の紙を王女様に渡したのに、何一人カツコつけてんのよ！！」

「……ゴメン、あん時は敵探すのに必死で忘れてた」

「……本日はバカなんだから。」

「……心配かけてんじゃないわよ」

「……？」

最後に何か言つたようだが、聞き取れなかつた。

「長い間起きなかつたから、死んだんじゃないかつて思つたわよ」

「……俺つて、いつまで寝てた？」

「多分今日で一週間つてところ」

「一週間……そんな長い間意識が戻らなかつたのか。どんだけダメージ喰らつたのか。」

「でもまあ、王女様も無事だし、良しとしましょ。」

……あと、あんたの怪我が治つたら、王宮で感謝状が贈られるから、

忘れないよつに」「元

「あ、ああ……」

アリアはそれだけ言つて帰つて行つた。

改めて体を見る。体中には包帯がグルグル巻かれていて、頭にも包帯が巻かれていた。

頬にはガーゼ（みたいな物）が貼られていたし、どんだけ怪我してんだつてツツコミたくなるぐらいの包帯の量だ。ほとんど肌が見えない。

「……包帯多い」

誰もいない部屋で、一人呟いた。

それから数日後。

俺ははれて退院できた。

「……まだ包帯巻いてるじゃない！？」

いきなりアリアに言われた。

「大丈夫だつて。激しい運動しなければいいって言つてたし。

それより行くんだろ？王宮」

「う、うん。じゃあついて来なさい」

アリアは歩き出す。俺は言われた通り彼女の後ろについて行つた。

「……これに乗つて

「これつて……馬車？」

俺の目の前には、あの時王女様が乗つて来たやつと同じ感じの馬車が停まつていた。

「そ、う、よ。王宮までは距離があるし、あんたがその怪我じゃあね

「そ、うだな、そ、うさせてもらうよ」

そして俺達は、馬車に乗り込んだ。

「おお……椅子ふかふか
乗り心地は……良かつた。

「着いたわ……！」が王宮よ」

「……でかい」

目の前には、俺の見てきた限りじゃあ一番でかい建物……お城があつた。

流石王宮と呼ばれるだけはあるな、と感心する。

「術人、ちゃんとついて来てる？」

「ついて来てるし」

「ここ広いから、迷わないよう」

確かに広いけど、迷うほどここを歩く気はない。

「……着いたわ」

「……やつとか、長いなあ」

「文句言わない！」

「……入るわよ」

「……はいはい」

アリアは王女の間に繋がる扉を押して開いた。

扉を開いた先には、俺らと同い年ぐらいの女性が立っていた。

「……」

アリアはその人に頭を下げる。

「……？」

「ほら術人、頭を下げなさい」

「あ、ああ……」

俺も言われた通り頭を下げる。

「別にかしこまらなくともよいですよ」

「……はあ」

俺はまた言われた通り頭を上げる。

……つて俺はこいつらの言いなりか……と、自分で自分にツッコんだ。

「フフフ、そちらの貴方も頭を上げて。今日は貴方達に感謝をするために呼んだのですから」

「は、はい」

「……こいつが王女か？」

「こいつとか言うな！」

「でも正解」

「こいつが王女かよ！？」

俺と同じ年齢で何？この地位の差。

「……」

「……？」

王女は俺をじつと見てくる。

「……何？」

「あ！い、いえ、何でもありません。

……感謝の儀の準備をするので少しお待ち下さい」と

そう言って彼女は部屋から出て行った。

「……」

アリアがこっちを睨んでくる。

「……何だよ？」

「何で王女様は、あんたを見つめていたのよ？

……もしかして知り合い？」

「知らないし」

「じゃあ何で……？」

「だから知らないし。

……知り合いの誰かと俺が似てんじゃない？」

俺は適当なことを言ってごまかした。

実際、俺はこっちの世界の人なんか知らない。知っているはずがないんだ。

「準備ができましたので、一ちらへどうぞ」
王女の使用人らしい人が、俺達を呼んでいる。

「それじゃ行くわよ 術人」

「……はいはい」

俺達は使用人の後をついて行く。

つれてこられた場所は、体育館みたいに広い。

……多分王女様の部屋だ。王様が座るような椅子あるし、それに彼女が座るし……

「わざわざ遠くから、よく来てくれました。それでは、感謝の儀をはじめさせてもらいます」

そう言って彼女は椅子から立ち上がる。
そして、感謝の儀（ラシキモ）が始まった。

「……貴方に聖騎士（パラディン）の称号を差し上げます」

「パ……聖騎士！？ 術人が？」

彼女は俺にペンダントを渡す。

「……何これ？」

「これは、聖騎士の証です」

「……彼女はないのか？」

俺はアリアを指さしながら言つた。

「残念ですが、彼女には……」

「……」

俺はペンダントを投げ返す。

「……こんな物要らない」

「……！？」

「あんた！？ 何やつて……」

「……」

「俺には……必要ない」

「……そうですか」

王女は少し落ち込んでるような声を出す。

「……いいの？ 術人」

アリアが尋ねてくる。

「何が？」

「聖騎士の称号。位の高い人しか貰えない称号を、貴方は棄てたのよ？」

「だから言つただろ？ 俺には必要ないって。

「……？」

意味わからんないって顔でアリアは見ている。仕方がないか。俺と彼女達の考え方は、少しだけ違うのだから……

「待つてください」

いきなり王女が俺達を呼び止める。

「術人さん、少し時間頂けますか？」

「……別に」

「それなら私について来て下さい。

女性の方は先程の部屋で待たれるか、帰つていただいて結構です

「……じゃあ先に帰れ」

「……一人で帰れる？」

「大丈夫。私達が責任を持つて連れて行きますから……」

「ほら、王女様もそう言つてるし……」

「……わかった」

そう言つてアリアは部屋を出た。

そのあと俺は彼女について行き、ある部屋へとたどり着いた。

「……んで、何か用？」

王女は俺の質問に答えなかつた。

代わりに何かを呟いている。俺には聞こえない。

少し経つてから彼女は、俺に聞こえるくらいの声で言つた。

「…………お久しぶりですね」

「…………はあ？」

俺には意味が分からなかつた。だつて、知らない世界の、知らないはずの王女様が、いきなり“お久しぶり”なんて言つんだぜ？ 分からなすぎて頭痛いよ。

「…………人違ひじやない？」

俺は冷めた感じで言つた。

「…………忘れたのですか？」

「…………あの日の事を……」

「…………あの日？」

あの日つていつだよ？

「…………まあ、無理もありません。ここは…………この世界は、貴方の世界とは違つのだもの……」

「…………！」

何でその事をこいつが知つてんだ？ 俺が別の世界の人間だつて事を

誰にも話していられないはずなのに……

その前に、こいつは何で俺の名前を知つていたんだ？

アリアとの話を聞いていたのか？

いや、違う。アリアとは誰にも聞こえない小さい声で話していたはずだ。

本当に、俺は、こいつを、知らないのか？

とても、夢に出てくる少女に、似ている気がする……

俺が混乱している中、彼女は少しずつ俺に近づいて來た。

「あの日……貴方の世界で言つた“夏休み”に……あの公園で私達は一緒に……」

ああ……何かもう分かつてきただよくな分からないよくな……

とりあえず俺に理解できた事は……

夢に出てくる“執事をつれた少女”は、彼女……王女らしいことにつ
ことだ。

ただ、それでも疑問は消えない。

何で俺とは違う世界の人間が、俺のいた世界に来れたのか。

「……どうして私が貴方の世界に来れたか考えたでしょ?」

「何でわかるんだよ……」

「だつて、そんな感じの顔をしていたから……それに

「それに?」

「貴方なら、この話を聞いてすぐにそう考えると思いましたので」

彼女は一拍の間を空け、そしてまた口を動かす。

「お教えします。

…………時折、この世界と貴方の世界を繋ぐ“扉”が開くのです

「…………扉?」

「はい……扉というより魔法陣って言つた方がわかりやすいと思
います」

「…………」

俺がこつちに連れて来られた時に見た魔法陣……あれが扉か……

「魔法の事は分かった。けど、何であんたが俺の世界に來たか教え
る」

「え!……えつ……と」

彼女は何か言つたりそつにしていい。言つたら早く言つて欲しいん
だけど。

「えつ……と、恥ずかしいのですが、気まぐれに異世界に行きたく
なりまして……」

「…………え?」

気まぐれ?てめえ、今気まぐれつて言つたか?

その魔法は、気まぐれで使えるモノなのかよ!

「…………はあ~」

俺は溜息をついた。それを見た彼女は、更に顔を赤らめながら言った。

「あの頃は……その……まだ幼かつたから……」

「王女様！？」「

突然扉が開き、兵士らしき人が入つて來た。その瞬間に彼女は落ち着いた顔を見せ、冷静に返事をした。

「…………何事です」

その真逆で、兵士は落ち着かない様子で話す。

「敵が……敵がこの王宮を攻めて來ました！！」

「…………！」

兵士から告げられた敵襲に彼女も言葉が出ないようだ。俺は、動じていらない様に見えて、少し驚いている。

まさか、こんなどこで戦闘かよ……

「王宮にいる兵士達に伝えなさい……総員、戦闘配備！」「はっ！」「

兵士は素早く部屋から立ち去った。

「…………衍人さんは早く逃げてください。

…………本当は、こんな戦争なんかやりたくは無いのに……」

彼女は哀しそうな顔で言った。

「…………」

また、面倒な事に巻き込まれたな……俺は。

つくづく俺つて馬鹿だなって思う。

別の世界の人の事なんかほつとけばいいのに……

面倒な事が嫌なら、無視すればいいのに……

でも……誰かが哀しむ顔なんか見たくはない。見るだけで吐き気がする。

俺つて……本当に……中途半端な人間だな……

「…………」

「衍人さん！？」「

俺は何も言わず走り出す。

目指すのは……迫り来る敵陣だ。

「……痛つ！」

怪我してる場所が時々痛む。それでも俺は走る。

「君は誰だ！？」これは戦場だぞ！！」

分かっているぞ、そんなこと。

「……どいてくれ」

俺は小さく、でも力強く呟く。

「駄目だ！君みたいな一般人が……ましてや怪我人が来る場所じゃない！！」

「どけろって言つてるだろ！！」

俺は大声で叫ぶ。相手を睨む。

俺がしつこいから諦めたのか、または馬鹿だと思い呆れたのか、または俺の紅眼に畏れたのか、兵士は俺を通してくれた。

俺は、誰かの為に、誰かを殺す。

そんなのは偽善でしか……自分のエゴでしかない事ぐらい分かっているぞ……

それでも俺は……

「……行くぜ」

俺は戦場へと駆け出す。

俺は偽善者……

俺はエゴイスト……

人を殺す事ぐらい、覚悟しているわ。

設定紹介 其の1（前書き）

本編の設定を少しだけ紹介します。

本編を読んだ後に読まれる事をオススメします

設定紹介 其の1

“桐島家”

…… 術人と姉の二人家族。

両親は事故で亡くなっている事になっているが、 実際は不明。

“ 双銃 ”

…… 異世界での術人の武器。

圭一と一緒にやっていたオンラインゲームに出てくる武器をイメージして創り上げた。

異世界では珍しい銃器。

（形状は“ .h a c k / / G .U ”の双銃をイメージしました）
左右の銃に名前が刻まれてあり、右手の銃に“ M e s s i a h ”、
左手の銃に“ D E A T H ”と刻まれている。

奇妙な夢

…… 始めに術人や圭一が見ていた夢。

とある“ 能力 ”に目覚める者は必ずこの夢を見ねらしい。

7話 覚悟

戦争になると、俺は直ぐに双銃を敵に向けた。

前回の戦闘や、王宮で見た味方兵士の鎧の色を覚えていたから、敵味方を分けるのは簡単だった。

しつかりと銃口を定め、トリガーを引く。

「ぐあああ！！」

「…………」

俺がトリガーを引く毎に叫び声が聞こえる。

銃弾が貫通した所から、赤い液体が……血が吹き出る。

そして、バタツと倒れて動かなくなる。

俺は直ぐさま次のエリアへと移動した。

俺は、俺が殺した人の死体を見ない。いや、見たくない。

見たら、俺の覚悟が揺らいでしまいそうだったから……

次のエリアが一番激しかったと思う。

着いた時から足元には沢山の死体があつた。

俺は直ぐさまこのエリアの戦闘に入りした。

「…………くつー！誰だ君は！？」

敵と剣で競り合っている味方兵士が俺に言った。

俺は間髪入れずに言い放つ。

銃口は、彼が競り合っている敵に向けたまま……

「あんたらの味方だよ」

幾つかの銃声が聞こえ、目の前の敵は、血を流しながら倒れた。

「あ、ありがとう……でも、君は直ぐにここから……」

「…………」

俺は、彼が最後まで言つ前に動きだす。

「ぎゃああつー！」

また一人、銃弾を喰らって死んだ。

もう何人殺しだらう……

顔や服に返り血を浴びている。シャツが真っ赤に染まるほど……
足元には数え切れないほどの死体がある。

「……」

後ろから足音が聞こえる。振り向くとそこには剣を持った敵兵士が立っていた。

そして、俺に向かつて勢いよく走り出した。

「あいつらの……仲間達の仇！！」

そう叫びながら、兵士は剣を振り下ろす。

俺はとっさに双銃で防ぐ。

全く、本当に双銃は便利だとつくづく思う。
遠距離から中距離は銃弾だけで何とかなり、至近距離は銃口の近くにある剣で攻撃や防御出来る。

だが、今回はヤバい。怪我してる場所が痛み、力が入らない。

「……くつ！」

あまり使う気はなかつたが、魔法を使うしかないと思つた。

「……どける！！」

俺が叫ぶと同時に、黒い影が相手を吹き飛ばした。

倒れた相手に銃口を向ける。

銃声が響いた。

相手は動かなくなつた。

「……くつ」

左腕に痛みがはしる。怪我ではなく、何か別の原因で痛んだ。
その痛みは、何かに締め付けられる様な痛みだつた。

倒れこんでいる俺の下に、相手兵士達がぞろぞろと集まってきた。

「大丈夫か！？？」

後ろからは味方兵士の声が聞こえる。

「いま助けに行くぞ！」

「来るなっ！？」

「俺は叫ぶ。そして、魔法で彼等を包む。

「何をするんだ！！？」

「そこでじつとしてろ。危ないから……」

俺は双銃の弾一つ一つに魔法を纏わす。

そして、銃口を空に向ける。

トリガーに手をかける。

そして、引いた。

無造作に撃ちまくつた。

空に幾つかの黒い線が舞う様に飛ぶ。

そして、相手を狙つて落ちてきた。まるで流星群の様に……

相手は次々と倒れていぐ。

最後の一人が死んで、回りには味方ぐらいしかいなかつた。

「…………」

傷が痛む。意識も朦朧としている。

意識を保てず、俺はその場に倒れた。

朦朧とするなか、兵士が俺を王宮に運ぶのが分かった。

誰かが何かを俺に呟いている。

少しずつ意識が遠のいていく。

そして、目の前が暗くなつた。

「……久しぶりね」

誰かの声が聞こえた。田を開けるとそこには、夢の中だった。

「……」

田の前には変わらず少女がいた。

「一つ聞いていいか?」

「……何?」

「君が居る場所のヒントみたいなものを教えてくれ。場所がわからないと探せない」

「……どうしてなの?」

「……?」

俺の質問とは違う答が返ってきた。

「どうしてまだ、私を捜そうとするの? あんな事の後なのに……」

「どうしてって……約束したし……」

「貴方は……恐くないの?」

「……何で?」

「だつて、あんなに傷だらけで、一步間違えれば死ぬのよ……?」

「……クスッ」

つい笑ってしまった。

「お前……結構、人の事考てるじゃん

「何言つて……」

「俺は……死なない

「……えつ?」

彼女は驚いた様子でこちらを見る。俺は、俺の想いを囁く。

「……あいつらの所に帰るまで……死ねない」

そしてその続きを、俺は柄にもなく微笑みながら囁く。

「だから……大丈夫。ちゃんと助けてやるから、心配すんな

その言葉を聞いて、彼女は俯く。そして呟くように囁く。

「貴方は……おかしいわ」

「何とでも……」

そんなこと、自分でも知っている。俺の考え方がこの世界じゃ浮いているつて事ぐらい……

「…………王富」

彼女はいきなり言つて俺は驚いた。

「私が捕まっているのは、多分王富だと想つ」

「…………何処の！？」

「…………もしかして！」

俺が思った王富は、今俺が眠つてゐるであろう王富の事だ。

「貴方が居る王富ではないわ」

だが、彼女はそれを否定した。そのあと、彼女は少し考えていた。

「…………駄目！それ以上解らない」

「わかった。別の王富に行くときは気にしてみるよ」

少しずつ周りが明るくなつてきた。夢から覚める時間のよつだ。

「また……会える？」

彼女は心配そうに尋ねる。

その様子は大人びた少女ではなく、その年相応の子供だった。

「大丈夫だよ。

…………寂しくて泣くなよ？」

俺は少し茶化す。

「泣かないわよ！――」

大声で叫ぶ彼女が可笑しくて笑つた。

そして、目が覚めた。

夢が…………一回終わった。

8話 争イノ後ノ夜

田を開けると、そこは王女の部屋で、田の前には王女や学園の先生が何名かいた。帰ったはずのアリアも何故かいた。

「……やつと起きましたね」

王女が咳く。なんか泣きそうなんだけど？

「……泣くなつて。俺が氣まずいからさ」

「……そうですね、すいません」

彼女は顔を上げて、ニコッと笑う。

「大丈夫だつたかい？」

次に尋ねてきたのは、学園長だった。

「……ええ」

少しの沈黙がはしる。俺が先に口を開いた。

「すいません、迷惑かけたみたいで……」

「気にしてはいません。ただ、他に気になることがね……」

そう言つて学園長は、俺の左腕をじっと見る。

「……？」

「いえ、こちらの話です。気にななくて結構です。それではお大事に」

それだけ言つて学園長は帰つて行つた。先生達も一緒に……だ。

そして今度はアリアが近寄つてきた。

「……あんたは本当にバカね」

「いきなり罵倒かよ。」

「……つるさい」

そう言つた彼女は今にも泣きそうな様子だった。

そして、最終的に泣き出してしまつた。

「……死んだと思ったんだから……」

「……悪かった。心配かけて」

「そうよ！心配かけてんじゃないわよ……」

アリアは俺を睨むが、少ししたらまた泣き出した。

俺は、ベットに顔を伏せて泣く彼女の頭を撫でてやつた。また睨まれた。

幾らか時間が経ち、アリアも帰宅の準備を始める。

「結局、術人はその怪我が完治するまでここに居るのね？」
「まあ…… そうなるかな」

実は、俺の知らない間にそういう事になっていた。

“俺の怪我が完治するまで王宮に留まる”事を言い出したのは、なんと王女だった。彼女は自分のせいで俺がこいつなったと思っているらしい。

「一つ忠告しておくれわよ

アリアは真顔でこぢりを見つめる。

何だよここの緊迫感は？

「お…… おお

何かヤバい事でもあんのかよ？

「……王女様に手を出すんじゃないわよ？」

「…… なんで？」

「王女様は次期女王になられるお方よ！ ふざけたことしがしたら、私が貴方を本気で殺すからね？」
俺は大きく溜息をついてしまう。

「なぜに溜息！？」

「お前や…… 俺の状態見てみ？」

俺はアリアに、今現在の体の状態を見せつけた。

「体中に包帯を巻かれているし、正直、動くと痛い。無理だろ？」
アリアは小さく頷く。分かつてくれたみたいだ。

その前に、俺が王女に手を出す事はまず無い。ありえない。

「本当に手を出さないでよ…… 念のために言つけど」

どんだけ警戒されてんの？……俺。

「大丈夫だつて……まだ死にたくないし……」

「……本当に？」

「お前は気にしてすぎ」

「……わかった」

アリアはようやく諦めてくれた。そして部屋を出て行った。

「……ふう」

俺は一息つく。そして、窓の外に見える月を見つめる。俺の世界で見える月より大きく、黄色く怪しく輝いている。それは、あの日に見た月と似ていた……いや、同じだった。俺は体を見る。前よりも多く包帯で巻かれている。

「……」

怪我しそうだなって自分でも思つ。

溜息を一つはく。そして、左腕を天に向けて伸ばす。次からは怪我をしないうちにしよう。相手とは一定の距離を保つ事を意識しよう。

「……寝よ」

俺はそう呟いて目を閉じる。ゆっくりと眠りに落ちていった。

またあの日の夢を見た。幼い頃の俺が、同じ年くらいの女の子と公園で遊んでる夢。

幼い俺は無邪気に（多分その女の子の）名前を呼ぶ。何度も、何度も……

“マコナちゃん”と……

不意に田が覚めた。

「…………」

窓から日差しが差し込む。眩しくてつい手で田を被つ。

「…………？」

何故だろ？俺の隣側の布団が膨らんでいる。何かが隣にいる。俺はゆっくりと布団を剥がす。

そこには、何故か王女が眠つてた。しかも布団にがつたり潜り込んでやがる…

「…………チツ」

舌打ちをしつつも、俺は彼女を揺さ振つて起こうとする。全く起きない。

「てめえ、早く起きろつて！」

そう呟きながら揺さ振る。

ようやく田を覚ました。

「…………」

彼女は驚いた様子でこちらを見つめる。驚いたのはこちらの方なんだけど……

「あの…………け、怪我が気になつて…………それで…………」

王女は顔を赤くしながら言つ。

「顔赤いぞ？熱あるんじゃない？」

そう尋ねると彼女は溜息を一つついた。

「行人さんは鈍感です…………」

「…………何か言つた？」

「別に、なんでもありません」

何か怒つてる？彼女は頬を膨らませ、そっぽを向いた。

「…………？」

俺には彼女が怒つてる理由がわからなかつた。

「怒つ……てる？」

気になつたので聞いてみた。

「怒つてません！」

彼女はそう言つたが、その表情は、やせぱぱつ怒つてゐる……ところへ
り、拗ねているようだつた。

「……」

俺はベットから動き出さうとした。

「何してゐるんです?」

「いや、王様がお疲れに見えたので、休ませてあげようといふ……」

「私より貴方の方が最優先ですよ」

「でも、またこんな状況になつたら、あなたは嫌つしょ? それに俺
は別の部屋でもいいし」

「で、でも……」

めんどうくさいこと、これだけ言つても彼女は遠慮を続ける。
参つた様子で俺は頭を搔きむしる。

「……お前はこのままでいいんだな?」

「……ええ。貴方の怪我が治るまではこのままでいいですかわ

「……じゃあ、お言葉に甘えて使わせて貰つ

……そうこう詫で、俺は彼女の部屋のベットで療養することとなつ
た。

そしてまた、次の日の夜。

「……」

「……すう~」

「……なんでまたいるわけ?」

俺の横で寝息が聞こえる。

そう……また彼女が横で眠つてゐるのだ。

彼女は気持ち良さそうに寝つてゐる。

「……つ~」

多分……いや、絶対この状況は続くんだろうな。この時になんかそ
う思つた。

……どうでもいいけれど……

最終的にそう思いながら目を閉じた。

怪我をして、俺が学んだ事は……

人はその状況に慣れると、気にならなくなるって事。

そして、その状況になる前の事を忘れてしまう事だ

たとえそれが、自分にとってとても大切で当たり前だった事でも……だ。

俺が王宮で世話をなつて一週間になる。
俺の傷は、ほぼ完治したと言つてもいい位に回復した。今では少しずつ双銃の点検をしたり、王宮の人達には内緒で、こつそりと魔法を試したりしている。（何故かここの人達は、俺が魔法を使うのを嫌がるんだ）

「…………
それでも、朝になると、隣に王女様が寝ているのは、変わらなかつた。」

「…………
最初の一、二日くらいは、
「またこつこついるしー。」
とか、

「何で隣に入るのさー？」

とか呟いたが、一週間くらいするともう、それにも慣れてしまった。
今日もまた隣で王女が寝てこる。

俺は彼女を起こさないように、そつとベットから出た。

「明日くらいに学園に戻ろうと思つんだ」

そう俺が告げたのは朝食中。

俺がそう言つと、彼女は驚いた表情を見せた。

「そこまで驚く事ないだろ？ 怪我が治るまでだつたし、いい頃合いじゃんか」

「そう……ですね」

そう言つた彼女の顔は、何故か少し残念そうだった。

「…………」

食後、俺は外の草むらに座つて、ただボ～ツとしていた。
空を見上げていたらなんだかうとうとしてきた。

そのまま草むらに寝転んだ。額に腕を乗せてゆつくりと瞳を閉じようとした時、

「何してるんですか？」

隣から声が聞こえた。王女様だ。

「見てわかんない？」

「ボ～ツとしてる」

「おしゃべりとうとうとしてる」

「同じ事ですよね。」

「隣に座つてよろしい？」

「…………勝手にどうぞ」

そう俺が言つと、彼女は本当に隣に座つた。

「風……気持ちいいですね」

「…………そうだな」

「…………」

「…………」

「…………」

彼女はいきなり無口になつた。俺も話すことがないので黙つておぐ。

「今日で貴方とこるの最後なんですね」

「…………最後つてこいつのはちょっと違つけど、それに近いかな

「…………少し寂しくなります」

「別に気にする必要はないだろ？」

「いいえ、少なくとも私は気になります」

「…………まあ、どうでもいいけど」

俺がそう言つと、彼女はクスクスと笑い出した。

「何で笑うわけ？」

「荷人さん、また言つてるんですもの。『どうでもいい』って、そつ言つた後、すぐに暗い顔になる。

「もう……貴方とは会えないのかな……」

「だから、それは少し違うって言つただろ?」

「……え?」

「別に一度と会えないわけじゃない。そうだろう? ただ、あまり会えなくなるだけ」

「……」

それでも彼女は不安そうな顔をしている。

俺は一度溜息をつき、その後、右手の小指を立てて彼女に近づける。

「……?」

彼女はどうすればわからず戸惑っている。

「指切りだ。ガキっぽいけど。ちゃんと約束しよう。どこかでまた会つて約束。昔にもやつただろ?」

「…………マリナ」

「…………今、私の名前を…………?」

「…………覚えていてくれたんですね?」

「…………それもおしい。この前思い出したばかり」

「それでも…………うれしい。やつぱり、ちゃんと名前を呼んで貰うのはうれしいです。周りは皆“王女様”“王女様”ってばかり」「ちゃんと名前を呼んで貰つてうれしいのはわかつた。それで、指切りをやるの? やらないの?」

彼女……マリナの出す答えはわかっていたが、意地悪な感じに尋ねてみた。

「そんなの、当たり前じゃないですか」

「そつ言つてマリナは俺の小指に小指を絡ませた。

「…………やっぱり子供っぽいですね」

「煩い。でも、これでいいんだ……はい、これで指切り終わりマリナは自分の小指を見ている。なんだか嬉しそうだ。

まるで、幼い頃にあの公園で出会つた彼女を、また見ているかの様

な無邪気な笑顔だ。

「……あ、私、先に中に入ります。もうすぐで隣国の方が来られるので……」

「わかった。……別に俺に言わんでもよくないか？」

「とりあえず報告です！」

「……どうでもいいけど」

そう言ったので、彼女は笑いを堪えながら王宮へと歩いて行った。そこまでウケルもんなのか？俺の口癖つて？
自問自答しても答えは見つからなかつた。

結構時間が経つて夜。

俺は王宮にある大きな露天風呂（？）に入っていた。

「ふう～、良～湯だなあ～」

久しぶりに入つた風呂はとても温かかつた。

「……何これ？」

俺は不意に、左腕に刻まれている黒い模様に気がついた。
模様というよりは、黒い線が腕を一周して描かれている感じだ。

「……まあ、いか

この時は、ただの線だと思つていた。だから、気にしない事にした。再び風呂を堪能していると、誰かがこつちに向かつて来る音がする。案の定、誰かの身影が見えた。

「……おかしい。この時間は誰も来ないはずなのに……」

ガラスの扉が開き、人が中に入つて來た。

驚いた事に、その人影はマリナだつた。

今回は、流石に俺も驚きを隠せなかつた。

「な！な！何で入つて来るんだよ！？」

「だ、誰もいないと、お、思つたから……」

驚いているのはお互い様のようだ。

「とりあえず、俺から離れて入れよ？そして、近づくなよ？」

「わ、わかりました」

そつ言つてマリナは俺から離れた位置まで歩き、そのあと湯に浸かつた。

「……」

「……」

「……」

互いに話し掛けれないまま時間だけが過ぎていく。

「……」

そろそろ風呂から出ようかと思つた。

ちらつとマリナの方を見る。なんかグッタリしているようだつた。

「どうかしたか？」

「……フラフラします」

「……は！？」

どうこう状態かを確かめるため、俺は恐る恐る彼女に近づく。よく見ると顔が赤い。

多分、のぼせたんだらう。

「歩けるか？」

「体に力が入りません」

「誰か呼ぶか？」

極力、俺が彼女を運ぶ展開だけは勘弁だ。

「出来れば行人さん、私を外まで運んでくれませんか？」

俺は舌打ちをうつ。全く思い通りにいかないものだ。断る理由が俺ではなく、仕方なく彼女を運ぶ事になつた。幸いにも、誰にも見られていなかつた。

これを見られたら、多分、間違いなく、処刑だらう。とりあえず熱気の少ない場所に彼女を運ぼうとする。問題は運び方だ。

理由は簡単。彼女が女で、俺が男だからだ。

背負うにしても、彼女の胸が背中に当たるのは気になるし、魔法を使つて運ぶのは、なんか危険だし……

悩んだ挙げ句、

「そういや、ここつ王女だし」

つて理由で、お姫様抱っこに決定した。

実行に移してみると、なかなかの恥ずかしさだった。

マリナでさえ、

「恥ずかしいです」

と、言う始末だ。

そんなこんなで無事にマリナを熱気の少ない場所に運んだ。

「体に力が入るようになつたら、すぐに出ようよ？」

それだけ彼女に言つて、俺は先に風呂場から出た。

すぐさま服を着て、部屋に帰り、ベットに倒れ込むように寝転んだ。

俺ものぼせたんだろうか、体中が重い。
わからない。

ただ、疲れた。

そのままゆっくり目を閉じていった。

その時にマリナが部屋に入つて來た。

そして、俺の隣に入つて來た。

「なにしてんの？」

「お願い、今日が最後だから、一緒に寝させて

「……別にいいけど」

そんなこと、今はビうでもいい。

ただ眠い。

目を閉じる。

ゆっくりと眠りに落ちていく。

耳元でマリナが呟く。

「……おやすみなさい、術人さん」

それを最後に俺は眠つた。

10話 死ナナイ覚悟

早朝になつて、俺は王宮から出る馬車に乗る予定になつてゐる。

学園へと戻るためだ。

「ありがとな、長い間世話になつた」

「いえ、こちらも楽しかつたです」

「楽しかつた？ 何で？」

「別になんでもないです。気にしないで」

彼女は小さく微笑む。

「……そんじゃまた」

そいつって俺は馬車に乗り込む。

「また……会えますよね？」

乗り込む前にマリナが言つた。

俺は彼女の方を向く。そして、小指を立てて一言。

「指切り」

彼女も小指を立てる。

「そうですね」

「忘れんなよ？」

「はい、忘れません」

「俺は忘れるかも」

「また会えたら、私が思い出させます」

「言つようになつたじゃないか、と俺は感心する。

「また……何処かで」

マリナが言つ。

「生きてたらな」

俺も、それに答える。

馬車が動き出す。

マリナの姿が少しずつ小さくなる。

王宮も小さくなつていいく。

森に入つて、王宮は見えなくなつた。

これから約2時間ぐらいで学園に着く。

俺は制服のポケットを探る。

ポケットの中には携帯と音楽プレーヤーが入つていた。

こつちの世界に連れて来られたときに、制服に入つていた物だ。あれだけの戦闘の中でも持ち歩いていたのに、壊れていない。

イヤホンを耳につけ、音楽を流す。

ロック…♪ - POP…バラード…

俺が気に入つていた曲、元の世界でいつも聴いていた曲だ。

久々の音楽を楽しみながら、外の景色を堪能する。

あつという間に学園に着いた。

「術人！？」

真つ先に声を上げたのは、案の定アリアだ。

「ただいま」

「やつと帰つてきた」

「やつと完治だ」

「……王女様に手を出してないわよね？」

「ないない」

やつぱりこいつは警戒してたか。

「そう……ならいいけど」

「そういうやつどうしたんだ？そんなに魔法の練習なんかしてた」「あんたは知らなかつたわね。明日に魔技試験があるのよ」

「……魔技試験？」

聞き慣れない単語だ。

「“魔法技術検査試験”……略して魔技試験よ」

「ふう〜ん……で、どんなことをするわけ？」

「簡単よ、魔法の力を計るの」

「意外と簡単」

「簡単だけど、この試験でクラスが変わるのは。

魔力が高いほど上位のクラスに入れる」

「ふうーん、ようするに魔力が強ければいいんだな」

「あんた、そんなに自信あるの?」

「おう」

「あれだけ休んでたのに?」

「不思議とね」

「あ! そういうえば制服が届いているわよ」

「制服?」

「これ」

アリアは自分の着ている制服を突く。
俺はすぐに納得した。

そういうえばこの学園に入学したときに注文したつけ?

「その制服もボロボロだし、いい機会じゃない?」

「そうだな、着替えて来る」

そう言うとアリアはただ手を挙げた。

「これが新しい制服か……」

今着ている制服は学ランタイプだが、この新しい制服はブレザータイプだ。おまけに黒いカーディガンもついている。

とりあえず今着ている制服を脱ぎ、新しい制服を着てみる。

「…………おー」

前のやつより軽い。

それに不思議な事に、身体中を廻る魔力がこの制服にも流れている
感じかする。

感想は、

最高だ。

俺は部屋を出た。ポケットには、音楽プレーヤーを入れて……

「似合つてんじやない」

アリアが言った。お世辞だつて事はわかっている。

「最高だ」

「何が？」

「着心地が。軽いし、身体中に魔力が流れてるつて感じ」「魔力が流れている？意味わかんない」

あれ？アリアには伝わらなかつた。

アリアは感じていないのでどうか？

昼の授業は模擬戦だ。

しかも魔技試験を明日に迎えているので、皆緊張した面持ちをしている。

「……ふう～」

気楽な奴は俺ぐらいだろう。

もつと皆、リラックスすればいいのに」と俺は思つ。

俺の対戦相手は、金髪碧眼の男子だ。

「悪いけど、君に負ける気がしないよ。僕はクラスで一、二位を争うくらいの成績だからね」
しかもナルシスト。

「それでは、始め！！」

先生の声が響く。戦闘開始の合図だ。

相手は地面に魔法陣を素早く描く。流石は成績優秀者。

地面から沢山のゴーレムが現れる。

土系統の魔導師らしい。

「……さて、行くか

俺は双銃を見つめる。

今、俺の双銃は、先生の魔法で、ゴム弾みたいなものしか出ないようになつてい
る。

模擬戦用だ。

神経を集中する。

数は……多い。

でも、苦戦する数じゃない。

銃口をゴーレムに向ける。

トリガーを引く。

実弾より威力は劣るが、ゴーレムは倒せる。

魔法も纏えるようだ。

魔法をゴム弾に纏わせ、放つ。

黒い閃光が次々とゴーレムを碎く。

後ろに気配が。

避ける。

トリガーを引く。

今は、戦場全体に神経が張り詰めている様な感じだ。死角に入られ
ても、すぐにわかる。

銃口を後ろに向ける。

放つ。

絶好調。

「……！」

油断した。

ゴーレムの攻撃が当たる。

それほど痛くない。

この制服は軽い。

しかも丈夫だ。

「……よし」

俺は、相手の攻撃が当たらない程度の距離を保ちながら、敵を倒して
いく。

「ゴーレムは全て消え、残るは金髪ナルシだけになった。
まだ魔法陣を描く。

次は剣だ。

いいだろ？。相手してやる。

俺は素早く接近戦に持ち込んだ。

剣と剣のぶつかり合い。

金属と金属が当たる音が響く。

流石、自称成績優秀者。剣の扱いは長けているらしい。
でも、

俺の方が一步上手。

相手の攻撃を右の銃で受けながら、左の銃で相手の足を撃つ。
足から崩れ落ちる。

すかさず銃口を向ける。

トリガーに指をかける。

「ま、参った！！」

相手は手を挙げ、大きく叫ぶ。

トリガーから指を離す。

ちなみに、最後のやつ、撃つ気はさうたらなかつた。脅しこいつやつだ。

「……」

身体が軽い。
気分は最高。

絶好調。

相手はまだ座り込んでいる。

俺は彼に手を伸ばす。

「強かつた。流石だ」

彼は驚いた様子でこちらを見る。

少ししてから、俺の手を掴み、立ち上がった。

「ありがとう」

「どう致しまして」

俺は振り向き歩きだす。

「どうして？」

「…………？」

彼は俺に尋ねてきた。

「君はあれだけ休んでたのに、どうしてそこまで強い！？」

「…………さあな」

俺はそう答える。自分でもわからないからだ。

「君、あの時と少し変わったか？」

彼はそう言った。

少し間を開けてから、俺はこう繋げる。

「…………強いて変わったとすれば……」

“覚悟”……かな

「…………覚悟……」

「そう、死なない覚悟。そんだけだ」

俺はそう答えてすぐに部屋に戻りうつした。

彼には解らなかつたようだつた。

そんなこと、簡単だ。

ただ死なないよう気につければいい。

相手の攻撃に当たらないようにするだけだ。

そのために、出来ることは全てやる。

神経を張り巡らすのもそのうちの一つ。

他の奴らにはわからないのかもしれない。

この世界は、死んでも、名誉になる。

死んだら、

そこで、

終わりなのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1081x/>

DEVILS NAME

2011年11月30日21時45分発行